

## 本承寺建築調査報告書\*

多米 淑人<sup>\*1</sup>, 吉田 純一<sup>\*1</sup>

### Report of the Research Survey on the Honjyo Temple

Yoshihito TAME<sup>\*1</sup> and Junichi YOSHIDA<sup>\*1</sup>

<sup>\*1</sup> Department of Architecture and Environmental Engineering

Honjyo Temple is the Hokke sect Shinmon school in Iehisa, Echizen City, Fukui Prefecture. “Hondo” and “Kuri”, “Sanmon”, “Syoro” are built in precincts of the temple. The frontage and the depth are same five span, “Irimoya-zukuri” and “Hirairi”, with one span “Kohai” on “Hondo”. The frontage is “5-ken” and the depth is “11.5-ken”, “Kirizuma-zukuri” and “Tsumairi” on “Kuri”. A single bay “Yakuimon” gate, “Kirizuma-zukuri” and “Hirairi” on “Sanmon”. The frontage and the depth are same one span, “Irimoya-zukuri” on “Syoro”. All these are the buildings where are in the during the late Edo period. Honjyo Temple’s precincts is good scenes by these buildings.

**Key Words :** “Hondo”, “Kuri”, “Sanmon”, “Syoro”, “Munafuda”

#### 1. 本承寺の概要

本承寺は越前市家久にたつ法華宗真門流の寺院で、福井鉄道福武線家久駅から県道 188 号線を西に 200m ほど進んだ場所に位置する。本承寺発行の『寺歴概要』<sup>(1)</sup>によれば、永禄 2 年 (1559) あるいは同 3 年 (1560) に開基日伝が現在の玄妙庵付近に創建、その時真言宗より改宗したと伝わる。その後、五世日闇が現在地に移転建立、九世日行が本堂を再建した。十三世日逞の代に本興寺 (越前市国府) の末寺から総本山本隆寺直末となり、十六世日通が山門および鐘楼を建立し、十八世日政が現在の本堂と庫裏を再建している。

本承寺境内は北側の山門を入ると (Fig. 1), 右手に庫裏がたち、その北側には白漆喰壁の土蔵が接続、南側には、順に向唐破風を持つ式台 (太鼓堂) と本堂が接続する。鐘楼は式台の向い側にたち、鐘楼の北側に玄妙庵、南東に三十番神堂がたつ。境内の南西 (本堂背面) には Fig. 2 のような池泉庭園と築山が造られ (十九世日啓整備)、庫裏から望む良好な景観を醸し出している。南東の一角には 6 基の石塔が並びたち、その奥にブロック塀に囲まれた墓地が位置する (Fig. 3)。



Fig. 1 境内



Fig. 2 築山からみた池泉庭園

\* 原稿受付 2015 年 2 月 25 日

<sup>\*1</sup> 建築生活環境学科

E-mail: tame-yoshi@fukui-ut.ac.jp

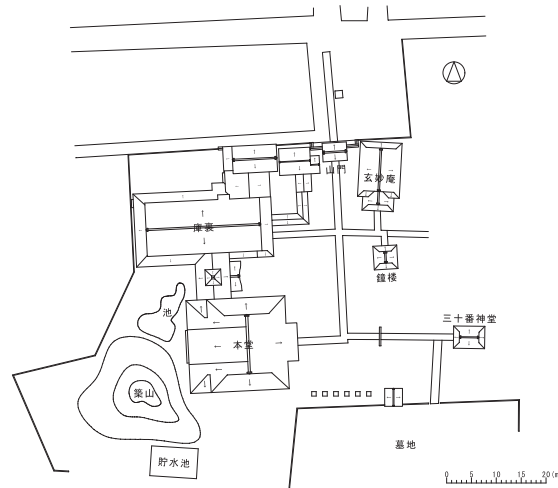


Fig. 3 本承寺配置図 1/1500

## 2. 伽藍建物

### 2.1 本堂 (Fig. 4~6)

#### 2.1.1 建築形式

本堂は正面五間（約 13.90m）×側面五間（約 13.39m）、入母屋造・平入り、棧瓦葺、一間（約 5.2m）向拝付で、正面と側面に縁が付く。妻飾は二重虹梁墓股・太瓶束で、懸魚は三つ花懸魚の鰭付である。向拝柱は 290mm の角柱で、この柱頭に連三斗が載る。向拝柱間は波状の渦と若葉の絵様を施した水引虹梁で繋ぎ、木鼻は猿の丸彫である。水引虹梁の上は 2 つの出三斗で 3 分割し、その間は中央が植物の丸彫、左右がともに獅子の丸彫の墓股で、本堂側には波や植物、獅子などを彫込んだ 4 つの手挟がつく。縁は切目縁で、擬宝珠高欄が廻り、木階部には登高欄と袖高欄も付く。

身舎側柱は、いずれも直径約 250mm の丸柱で、これらは飛貫と頭貫、台輪で繋ぐ。台輪上には柱位置に出三斗が載るだけで、中備はみられない。正面中央一間（5,231mm）は、差鴨居で柱を繋ぎ、腰高障子の 4 枚引違戸が入る。正面の中央一間以外は縁長押と内法長押が廻り、柱間装置はいずれも腰高障子の引違戸である。

内部の平面は外陣、左右の脇陣、内陣の 4 つに分かれている。外陣の間口は桁行一杯の 7 間で、奥行 1 間半、21 畳の畳敷き、天井は棹縁天井である。この外陣の上手に、向かって左から脇陣（左）、内陣、脇陣（右）が並ぶ。外陣と脇陣境は無目敷居、外陣と内陣境は手摺で境界を分ける。脇陣（左）は間口 2 間、奥行 6 間、24 畳の畳敷き、格天井で、奥には柱や頭貫、組物（出組）などに金箔や極彩色を施した鬼子母神を奉る祭壇をもつ。一方、脇陣（右）は間口 2 間、奥行 5.5 間、22 畳の畳敷き、格天井で、奥には位牌壇を設ける。位牌壇の天井は湾曲した棹縁天井で、壁は金箔貼りである。

中央の内陣および内々陣は間口が 3 間（5.79m）、畳敷きの凹の字部分が内陣、板敷き部分（下凸部分）が内々陣で、これらの天井は棹が黒漆塗り、天井板が金箔貼りの折上格天井である。内々陣の後寄りに四天柱をたて、その奥に来迎柱と来迎壁を設け、須弥壇を置く。四天柱は金箔貼りで、木鼻や頭貫、台輪、尾垂木付二手先の組物、植物の丸彫の墓股、支輪などには極彩色が施されている。天井は棹と支輪が黒漆塗り、天井板が金箔貼りの折上格天井である。この須弥壇は段々状になっていて後方に行くほど高くなっている。須弥壇の下方に位置する後戸は身舎・庇境の柱列よりやや奥寄りに開く。須弥壇の左右にある脇壇はともに奥行一間で、それぞれに日像と日朗を奉る厨子を置く。

本堂身舎の内部の組物は、外陣と正面縁境の柱および前述した四天柱を除く、すべての丸柱に付く。これらの組物はいずれも柱から腕木状の肘木（升付）を張り出し、その上に平三斗拳鼻付の組物を載せ、その実肘木が天井の廻縁を支持する。

後戸の後方は、一間幅の廊下（下屋部分）になるが、上方に須弥壇（来迎壁）や脇壇、祭壇、位牌壇が張り出しているため、天井は低くなっている。

### 2.1.2 建築年代

本堂は、当寺院発刊の『寺歴概要』および今回の調査で発見した棟札によれば、弘化3年（1846）に上棟供養を行なったとある。建築形式や木肌の具合などから、本堂の建築年代はこの2つの資料にある弘化3年とみてよい。



Fig. 4 本承寺本堂外観



Fig. 5 本承寺本堂内部（内陣）

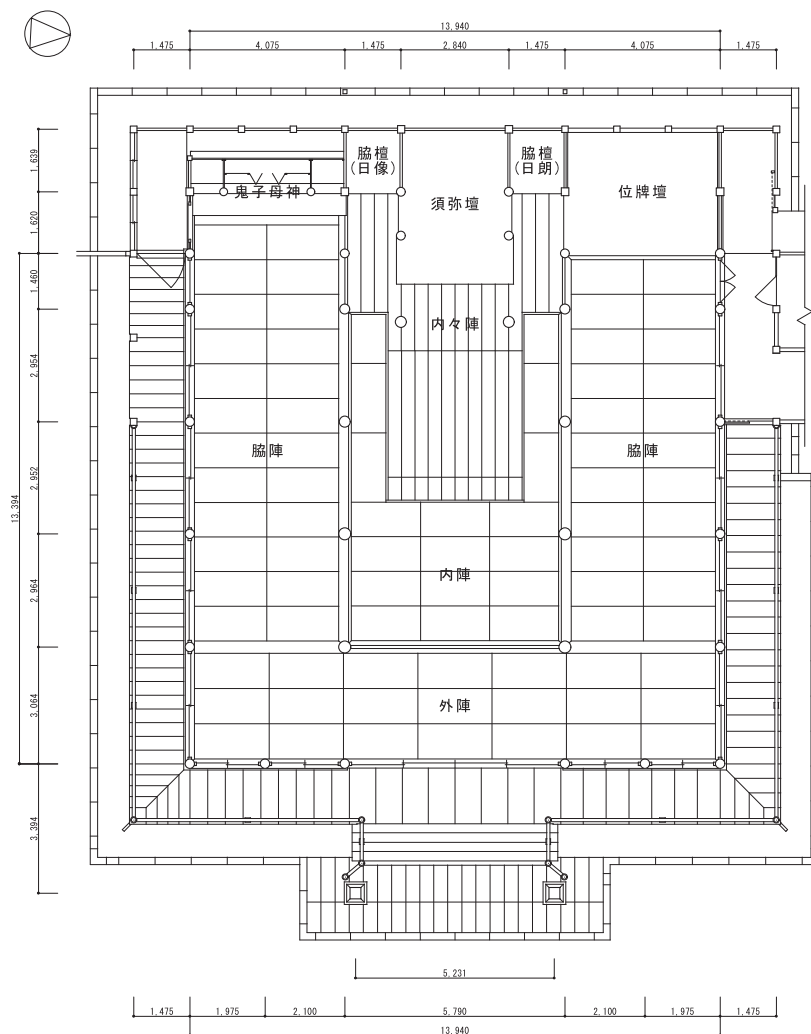


Fig. 6 本承寺本堂平面図 1/200



## 2.2 庫裏 (Fig. 7～9)

### 2.2.1 建築形式

庫裏は正面 5 間、側面 11.5 間、切妻造・妻入り、棧瓦葺の建物で、四方に下屋が廻り、北側に角屋が張り出す。正面の妻面は、束や貫の他に湾曲した虹梁を用い特徴的な外観を呈している。柱は主屋の大黒柱が 315mm 角、その両側の恵比寿柱と広間・台所境の 2 本、台所の主屋・下屋境の隅柱の計 5 本が 260mm 角、それ以外はいずれも 200mm 角から 180mm 角である。

内部は 2 列 6 室の広間型で、入り口を入ると間口 2.5 間、奥行 2 間、床はタイル敷、天井は化粧屋根裏の玄関である。玄関上部には 2 階厨子への荷物の搬入のための開口や滑車がみられる。玄関の北側は台所で、間口は 2.5 間、奥行は下屋分前に張り出すため、3 間となる。天井は主屋部分が根太天井、下屋部分が化粧屋根裏である。これらの 2 室の上手に間口 5 間、奥行 2.5 間、25 畳大で、力天井の広間がつく。この広間から南へ進むと式台（太鼓堂）を通して本堂へ繋がり、反対の北に進むと土蔵へ繋がる。

広間の上手には 2 列 6 室の座敷が続く。本稿では便宜上、それぞれの部屋名を南側の上手から南上之間、南中之間、南下之間、北側を北上之間、北中之間、北下之間とする。

南下之間、北下之間と南中之間、北中之間、北上之間は、それぞれ間口 2.5 間、奥行 2 間、10 畳の座敷で、北中之間には床と棚が付き、北上之間には床と仏壇が付く。南上之間は間口 2.5 間、奥行 2.5 間、12.5 畳の座敷で、大床と付書院が付く最も上格な座敷である。床は 6 室すべて畳敷き、天井は北下之間が力天井で、それ以外の 5 室はいずれも棹縁天井である。2 階は物置としていたが、現在は広間北側と北下之間の上部に後補の部屋が造られている。

### 2.2.2 上之間の増築

『寺歴概要』には、二十世日軌によって大正 14 年（1925）に「庫裡西方二室及び物置、浴場等の下屋並びに縁側土縁拡張を住職並びに特志家の寄附にて為す。」とある。つまり、当庫裏は元々奥行 8.5 間（田の字型の座敷）であったが、大正 14 年の増築によって現在のような奥行 11.5 間（2 列 6 室型の座敷）になったことが窺える。これは、棹縁天井の天井板の違いや小屋組からも明らかで、南側の 3 室の天井板を比較すると、南下之間と南中之間の天井板は幅が狭く、木目や色合いは類似しているが、南上之間の天井板は幅が広く、木目や色合いも先の 2 室と明らかに異なる。さらに、小屋裏をみると北中之間の床の壁を境として、小屋裏にも壁がたち、梁は切れ、部材の色合いも、上之間と中之間より下手では明らかに異なっている。

### 2.2.3 建築年代

今回の調査で庫裏の小屋裏から万延元年（1860）と記述のある棟札を発見した。建築形式からこの棟札にある万延元年は、増築以前の庫裏の建築年代を示している。



Fig. 7 本承寺庫裏外観



Fig. 8 本承寺庫裏内部（南下之間から南上之間をみる）



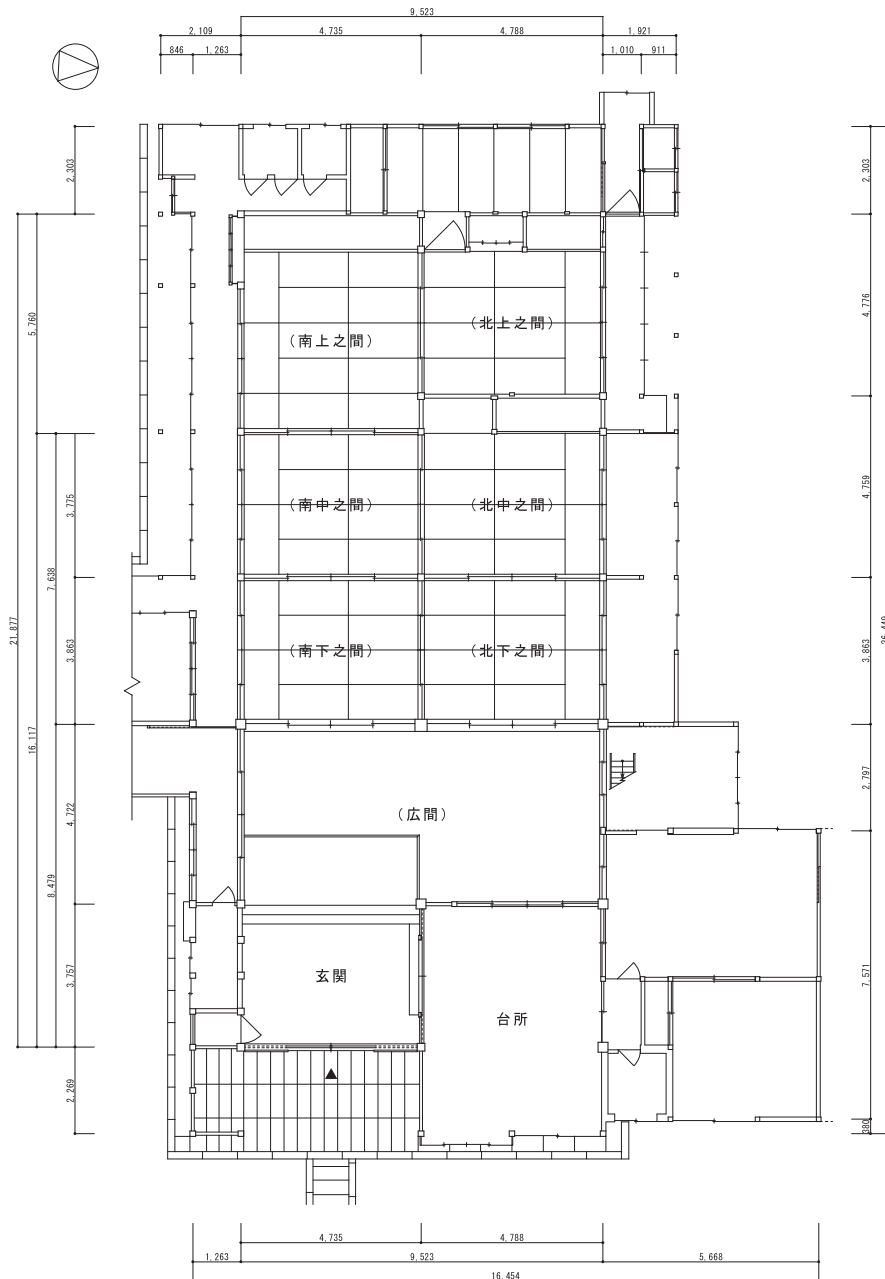


Fig. 9 本承寺庫裏平面図 1/200

## 2.3 山門 (Fig. 10~12)

### 2.3.1 建築形式

山門は、境内の北側に位置する。切妻造・平入り、一間一戸の薬医門で、左右に築地塀が取り付け、正面向かって右側の築地塀には潜りが付く。親柱は343mm×235mmの五平柱で、控柱は223mmの角柱である。正面は親柱の上に冠木を渡し、その上に腕木を架け、さらに虹梁を渡し、この上に出三斗の組物と中備（内側は拳鼻付）を載せ、桁を受ける。正面の虹梁の木鼻は建物の規模の割には大きい。背面は控柱頭の上に出三斗の組物を置き、水引虹梁を渡し、その上に出三斗（内側は拳鼻付）の中備を載せ、桁を受ける。妻飾は虹梁太瓶束で、懸魚は蕪懸魚鰭付である。天井は化粧屋根裏で、床は笏谷石の布敷である。

### 2.3.2 建築年代

山門の建築年代は、本承寺『寺歴概要』によれば、十六世日通（文化七年遷化）の時に建立し、十八世日政の代の弘化3年（1846）の本堂再建時に供養したとある。

しかし、今回の調査で確認した棟木下端に打ち付けられていた棟札には「再建主十六世松寿院 日通上人」、「十七世日同上人代造営」、「維時弘化三年丙午三月七日 本堂上棟之砌兼而□□建之者也」と記述され、さらに十八世日政の花押がみられる。したがって、山門は十六世日通が再建を立案し、十七世日同の代に造営され、十八世日政の代の本堂再建供養時に棟札を作成、打付けしたと考えられる。したがって、山門の建築年代は日同在職中と考えられる文化7年（1810）から天保元年（1830）である可能性が高い。



Fig. 10 本承寺山門外観



Fig. 11 本承寺山門細部

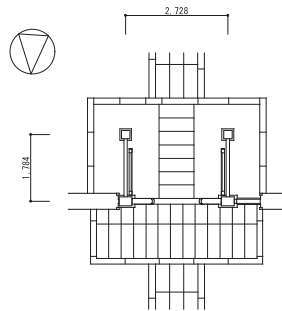


Fig. 12 本承寺山門平面図 1/200

## 2.4 鐘楼 (Fig. 13～15)

### 2.4.1 建築形式

鐘楼は、山門から境内に入って左手に位置する。方一間（梁間 2,390mm×桁行 2,390mm）、入母屋造の建物で、笏谷石積（3段）の基壇の上にたつ。柱はいずれも内転びの丸柱（直径 240mm）で、礎石、礎盤の上に載る。柱間は腰貫と飛貫、頭貫の3段の貫と台輪で繋ぐ。台輪の上に載る組物は隅が出三斗、中備が平三斗拳鼻付で、これらが軒桁を支持する。天井は格天井、床は四半敷の目地が入った土間コンクリートである。

### 2.4.2 建築年代

鐘楼の建築年代は『寺歴概要』によれば、山門と同様に十六世日通の代に建立し、十八世日政の代の本堂再建時（弘化3年）に供養したとある。さらに、寺内で保管していた棟札に「再建主十六世 日通上人」とあることから、鐘楼の建築年代は、日通の在職中と考えられる享和元年（1801）から文化6年（1809）の間と考えられる。棟札は山門と同様、十八世日政の代の本堂再建供養時に作成、打付けたものと思われる。



Fig. 13 本承寺鐘楼外観



Fig. 14 本承寺鐘楼細部

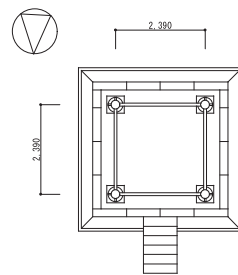


Fig. 15 本承寺鐘楼平面図 1/200

### 3. 棟札内の記述について

建物に関する棟札は、これまで寺内で保管していたものが3枚、今回の調査で発見したものが3枚の計6枚（次頁 Fig.16～21）である。Table 1 はこれらの棟札に記述されている内容や携わった工人の名前などをまとめ、各建物の建築年代順に整理したものである。

6枚の棟札の中で、記述されている年代が最も古いのは元禄8年（1695）年の旧本堂造営のもので、後は順に弘化3年（1846）の現本堂と山門、鐘楼の上棟供養、万延元年（1860）の庫裏再建、昭和33年（1958）の玄妙庵の改築上棟と続く。

以下は、これらの棟札の記述内容について、特筆すべき点について考察・検討していく。

Table 1 棟札の記述内容

建物名	建築年代と在上人名		棟札の記述					
	建築年代	上人	事項	棟札記載年	花押	棟梁・大工頭	番匠	肝煎
旧本堂	元禄8年（1695）	5世 日行	本堂造営	元禄8年（1695）（本興寺）9世 日詮	願藤左衛門	—	—	—
鐘楼	享和元年～文化6年（1801～1809）	16世 日通	（上棟供養）	弘化3年（1846）	18世 日政	横井善七	—	—
山門	文化7年～天保元年（1810～1830）	17世 日同	（上棟供養）	弘化3年（1846）	18世 日政	横井善七	—	傳兵衛
現本堂	弘化3年（1846）	18世 日政	上棟供養	弘化3年（1846）	18世 日政	横井善七	—	竹内五兵衛 馬場喜右工門
庫裏	万延元年（1860）	18世 日政	再建	万延元年（1860）	18世 日政	竹内武三郎	横井七兵衛	岸本源右工門
玄妙庵	昭和33年（1958）	日教(玄妙庵)	改築上棟	昭和33年（1958）	—	藤井常吉	—	—





Fig. 16 旧本堂造営棟札  
(元禄八年 1659 年)

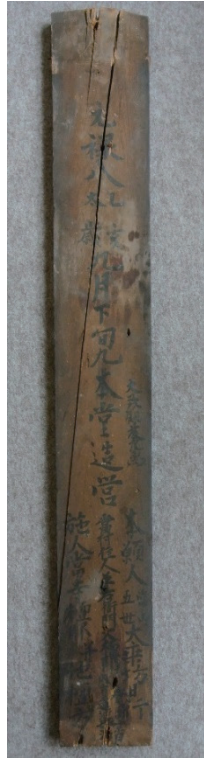


Fig. 17 現本堂上棟供養棟札  
(弘化三年 1846 年)

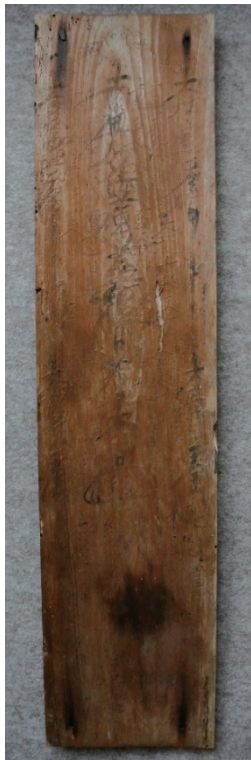
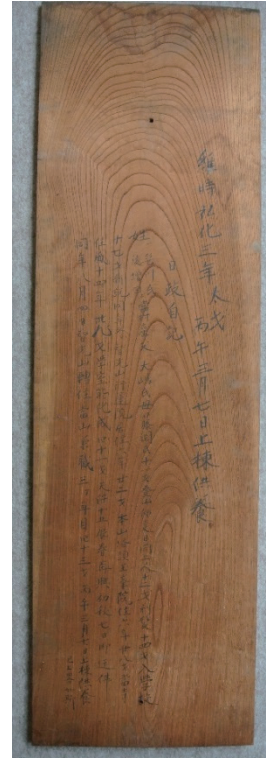


Fig. 18 山門（上棟供養）棟札  
(弘化三年 1846 年)



Fig. 19 鐘楼（上棟供養）棟札  
(弘化三年 1846 年)





Fig. 20 庫裏再建棟札  
(万延元年 1860 年)  
(赤外線カメラにて撮影)



Fig. 21 玄妙庵改築上棟棟札  
(昭和三十三年 1958 年)



### 3.1 本堂棟札

本堂に関する棟札は、上記のように元禄8年と弘化3年の2枚がみられる。『寺歴概要』に九世日行が「此の代に本堂再建すと云う。」とあることや十八世日政が弘化3年に本堂再建の上棟供養をしたとあること、さらに建築形式などをみても現在の本堂が江戸中期まで遡る可能性が低いことから、元禄8年の棟札は旧本堂に関わるものであり、弘化3年の棟札は現在の本堂のものと判断できる。

### 3.2 山門と鐘樓の棟札

山門と鐘樓は『寺歴概要』によれば、ともに十六世日通の時に造営され、十八世日政が弘化3年の本堂上棟供養時に先にたっていたこれらの建物も供養したとあり、現存する山門と鐘樓の棟札はこの上棟供養時に作成、打付けされたものと考えられる。この2枚の棟札は文字不鮮明や欠けのため、解読不明な箇所があるものの、山門の棟札に「本堂上棟之砌兼而□□建之者也」とあること、鐘樓棟札に「本堂上棟□□兼之□□」とあることから山門と鐘樓が本堂より前にたっていたことはほぼ間違いない。しかし、棟札の記述を詳細にみると、棟梁が横井善七であることは共通しているものの、山門は「再建主 十六世松寿院日通上人 十七世日同上人造営」とあるのに対して、鐘樓は「再建主 十六世 日通上人」とある。つまり、鐘樓の棟札に造営の記述がみられないことから、2つの建物の建築年代は異なり、鐘樓は十六世日通在職中の享和元年(1801)から文化6年(1809)の間にたてられ、山門はその後の十七世日同在職中と考えられる文化7年(1810)から天保元年(1830)の間にたてられたとみなすことができる。

山門と鐘樓が異なった時期にたてられたことは、実際の両建物の細部形式からも窺うことができる。両建物は上述したように、棟梁はどちらも横井善七であることから、もし同時期にたてられたとすれば、組物の木鼻や肘木の絵様などは酷似するはずである。しかし、平三斗の木鼻を比較すると、鐘樓の方は象鼻状の木鼻であるのに対して、山門の方は拳鼻の形、肘木の絵様は鐘樓が渦だけであるのに対して、山門は渦に目玉、若葉がみられ、両建物の細部の絵様は異なっている。

### 3.3 工人

6枚の棟札には棟梁あるいは大工頭が4人、番匠が1人、肝煎が4人の計9人の工人たちの名前が確認できる(Table 1)。

特に横井善七は、鐘樓、山門、現本堂の3つの建物すべてにおいて棟梁として名前がみられる。その後、横井善七の名前は確認できないが、14年後の万延元年(1860)の庫裏の棟札に番匠として同じ横井姓の横井七兵衛の名前がみられる。この二人の関係は、同姓であるとともに七の字も共通していることから親子あるいは子弟関係にあったと考えられる。

### 3.4 まとめ

以上、本承寺に残る6枚の棟札の記述内容を考察・検討したことにより、本承寺に現存する主要建物の建築年代は、鐘樓が享和元年～文化6年(1801～1809)と最も古く、次に山門が文化7年～天保元年(1810～1830)、本堂が弘化3年(1846)、庫裏が万延元年(1860)で、これらはいずれも江戸後期から江戸末期の建物であることを指摘できる。さらにこれら5棟の建物のうち鐘樓と山門、本堂の3棟の造営には横井善七が棟梁として携わり、庫裏の再建にも横井姓の工人が関わっていることも指摘できる。

## 4. 本承寺本堂と平等会寺本堂の比較

福井県内には、法華宗真門流の本山寺院として本境寺(小浜市)、本興寺(越前市)、平等会寺(鯖江市)の3ヶ寺がある<sup>(2)</sup>。中でも鯖江市平井町にある平等会寺の本堂は、本承寺の現本堂の造営より11年前の天保6年(1835)に再建されたと伝わるものである。本章では、本承寺本堂(弘化3年(1846))と平等会寺本堂(天保6年)の建築形式や平面について比較する。次頁および次々頁の図版(Fig 22～27)は両寺の平面図と外観および内部の写真である。

両寺の本堂の建築形式を比較すると、正面と側面がともに五間、入母屋造・平入り、棧瓦葺、一間向拝付で、



正側面の三方に縁が付くことは共通している。しかし、規模は本承寺本堂が正面 13.90m、側面 13.40m であるのに対して、平等会寺本堂は正面 17.43m、側面 15.31m で、正面側面ともに平等会寺本堂の方が大きい。

次に、平面構成をみると、主に外陣、左右の脇陣、内陣（内々陣）の 4 室で構成されていることは共通していて、内々陣の後寄りに四天柱と来迎柱、来迎壁をたて須弥壇を置き、その下方に後戸を設けることも同じである。

しかし、各部屋にはいくつかの違いがみられる。外陣は本承寺本堂が 13.94m×3.06m の広さで畳敷き、縁との境を建具、脇陣との境を無目敷居、内陣境を手摺によって分けているのに対して、平等会寺本堂は 17.43m×4.01m の広さで板敷き、縁との境は建具などをたてない吹き放し、内陣・脇陣境を建具によって区分している。つまり、本承寺本堂は外陣を内部空間としているが、平等会寺本堂は外陣を外部空間としていて、この点が両寺院の大きな相違点といえる。平等会寺の様に外陣の三方を吹き放とし、床を板敷きとするのは日蓮系本堂の比較的古式な形式<sup>(4)</sup>である。

左右の脇陣は、本承寺本堂は左が 4.08m×15.01m、右が 4.08m×10.33m で畳敷き、平等会寺本堂が 3.06m×11.30m の畳敷きで、広さに違いはあるが、内陣および内々陣との境を丸柱と無目敷居によって分けていることや奥に鬼子母神を奉る祭壇や位牌壇があることは共通している。

内陣および内々陣は本承寺本堂が 5.79m×11.95m の広さで凹の字型に敷かれた畳敷き部分が内陣、下凸の字の板敷き部分が内々陣である。一方、平等会寺本堂も畳敷き部分が内陣、板敷き部分が内々陣であることは共通している。しかし、広さは平等会寺本堂の方が本承寺本堂より、11.31m×11.30m と大きく、畳敷きの内陣の形は凹の字型の両側に手摺を付け、さらにその外側に 1 間分付け足した形になっていることも本承寺本堂と異なっている。

本承寺本堂と平等会寺本堂は、建築形式や主要な部屋の基本的構成はほぼ共通しているものの、本堂全体の大きさ（規模）や各室ごとには差異がみられる。特に外陣の取り付け方に大きな違いがあり、本承寺本堂は外陣を内部空間としているのに対して、平等会寺本堂では外陣を外部空間としていて、この点に両寺院の本堂の平面形式の大きな相違を指摘できる。

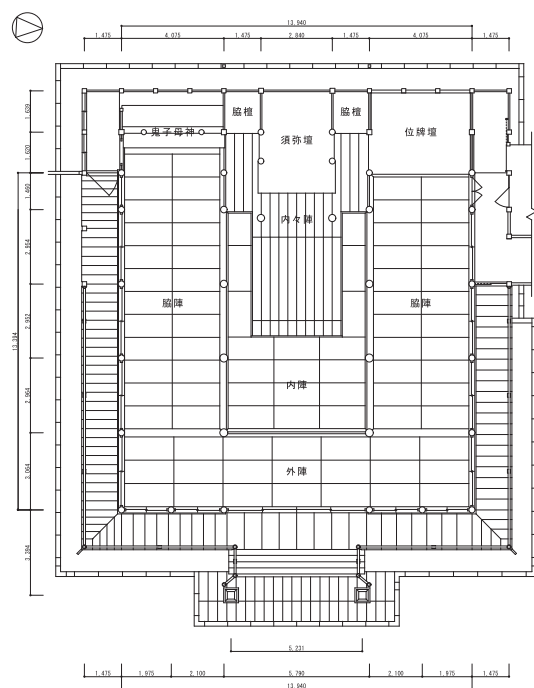


Fig. 22 本承寺本堂平面図 1/300



Fig. 23 本承寺本堂外観

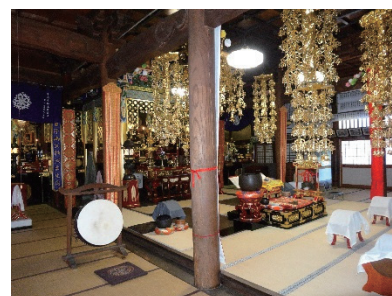


Fig. 24 本承寺本堂内部

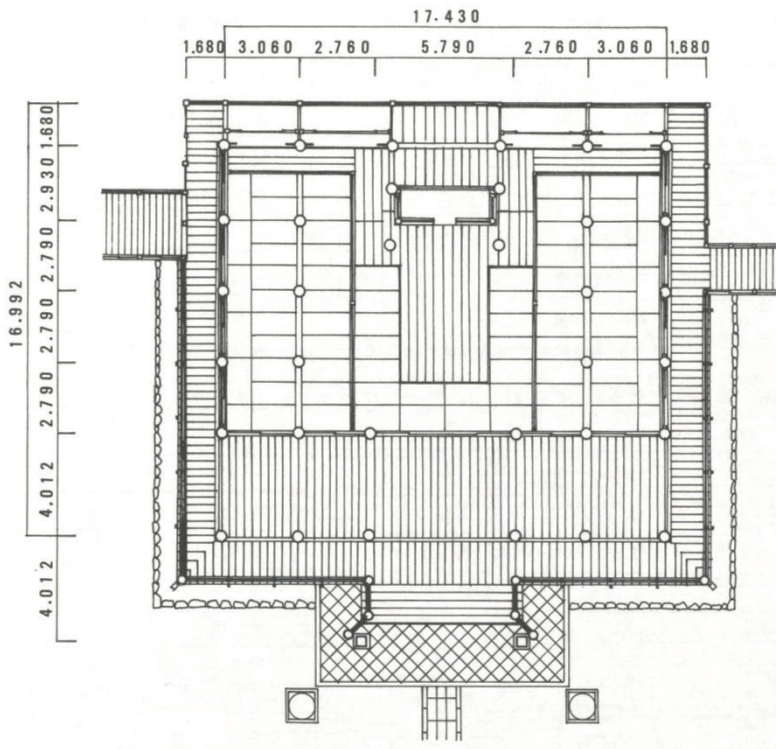


Fig. 25 平等会寺本堂平面図 1/300  
 (『近世社寺緊急調査報告書』<sup>3)</sup>より引用)



Fig. 26 平等会寺本堂外観



Fig. 27 平等会寺 本堂内部

## 5. おわりに

越前市家久の法華宗真門流本承寺の伽藍主要建物である本堂、庫裏、山門、鐘楼についてみてきた。これら4棟はいずれも建築年代が江戸後期から末期の建物で、棟札も現存している。しかも、本堂、山門、鐘楼は大幅な改修が認められず、ほぼ建築当初の形式を今に伝えている。生活の場である庫裏に関しても西側部分や台所、北側の下屋部分、2階に増改築がみられるものの主要座敷はほぼ当初のままである。また、庫裏と本堂の間の繋ぎ部分には正面に向唐破風造の張り出しをもつ式台（太鼓堂）を設け、本堂・庫裏とともに一体感を漂わす優れた寺観を構成している。

以上のように本承寺は、個々の堂宇とともにそれらが群となって優れた寺観を有する県内では数少ない法華宗（日蓮系）寺院の事例として貴重である。

## 註

- (1) 『寺歴概要』, 2000
- (2) 日蓮宗真門流 HP, <http://www.hokkeshu.jp/jiin/02/fukuiken.html> (参照日 2014 年 10 月 6 日)
- (3) 『近世社寺緊急調査報告書』, 福井県教育委員会, 1981.3
- (4) 外陣を吹き放しとする事例は、重要文化財指定の日蓮系の寺院の中では室町から江戸中期にみられる。

(平成 27 年 3 月 31 日受理)